

LW受容協力医師制度の展望

ルポ——一貫して在宅医療を推進し、1000人以上の最期を看取ってきた千場純医師の継続的な挑戦

人口減と高齢者の割合が増加する坂の町・横須賀。狭い道に車を走らせて在宅診療に向かう千場医師に同行し、実際に行われている在宅医療の現場をみた。



千場医師の活動の拠点。ここは交流、支援、学習の地域連携の場でもある。

「横須賀は山を切り崩して住宅地にしてますから、坂が多くてね。それに道が狭いから軽じゃないとダメなんです」

そう言いながら、千場純医師(72)は、垣根をこするように軽自動車を進ませる。同行した尊厳死協会の理事で、地元の横須賀市でリビングウイル(LW)の普及・啓発などで活動する川名理恵子さんが言う。「横須賀は人口も減ってますし、高齢者の割合も高くてね。高齢者の孤立が課題なんです。先生のように在宅診療してくださる方がいないと…」

軽が坂道を登りきると、玄関先で娘さんが出迎えてくれた。こ



診療所の待合室は気軽に語り合える場にもなっている。マガジンラックには尊厳死協会の会報・入会案内も。

の家には、91歳の夫と88歳の妻が暮らす。妻が悪性リンパ腫で入院

していたが、化学療法を断念して家に戻った。1週間ほど前のこと。近くに住む息子と娘2人の3人がローテーションを組んで、母親の介護にあたることになった。この日は娘さん2人が枕辺で、「まだ慣れなくて…」と言いながら、あ

れこれ動いていた。

「どう、お母さんは?」「便はどうなってますか?」「色は、こげ茶?」「ガスは?」

矢つぎ早に千場医師が聞く。ハンディエコーを腹部に当て、肝臓や胆のうのあたりを見る。

「ここにガスがありますね。軽息を止めて。息を止めすぎると死んじゃうからね。ハイ、もういいですよ」

「先生、水はどのくらい飲んでいいんですか」と娘さん。「そうだね、1日500ccくらいはいいけど、いっぺんにじゃなく、50ccを10回くらいに分けて」。

そこへ、エコーを当てられてい

しなかったという。

地域医療への貢献に対し「第7回赤ひげ大賞」

横浜で生まれた千場医師は、母親に勧められたこともあり医学部(名古屋大学)へ。「命」に関して、こんなエピソードがある。

小学校低学年の頃。地域のガキ大将たちと遊んでいた時だった。どぶ川を流されていく子犬を見つけた。子犬は必死に浅瀬の木切れにすがろうと、もがく。その時、それを面白がり、みんなで石を投げた。千場少年も投げた。誰かの1つが命中し、子犬は流れに沈んでいく。「ハッ」としました。子犬を殺して

しまったという大きな罪悪感にさいなまれました」と振り返る。初めて「死」について考えさせられた出来事だったという。

医学部を卒業すると、横浜市立大学附属病院、国立横須賀病院(現・横須賀市立うわまち病院)などで膠原病やリウマチなどの診療に携わりながら、地域の開業医の先生方との連携や地域医療の勉強会に積極的に参加。次第に多職種連携の在宅医療に関心を持つようになっていく。その後、介護療養型医療施設のパシフィックホスピタル院長に就任。さらに三輪病院の院長を経て、現在の「まちの診療所」つるがおかの院長に至る。この間、一貫して在宅医療を推進

たお母さんが言葉に力を込めて言った。「先生、1回、ガブっと飲んでみたい!」

高齢者250人ほどを基本的に2週間に1回

千場医師は、施設などを含めると250人ほど(うち個人は80人ほど)の高齢者の在宅医療を行っている。基本的に1人2週間に1回程度の診療。こうした在宅診療はほぼ毎日だ。

この日は、この家で50分ほどの診療を終えると、車を30分近く走らせて、次の訪問診療宅へ。76歳の夫と73歳の妻が、海の望めるマンションで暮らす。子宮がんの末

し、これまで1000人以上の最期を看取ってきた。6年前には、尊厳死協会の受容協力医師に登録している。横須賀で活動する川名さんたちとの在宅医療の勉強会に参加したのがきっかけだった。「多くの人を看取ってきて、尊厳死協会の趣旨に賛同したから」と言う。

こうした長年の地域医療・終末医療への貢献に対して、2019年、日本医師会などが主催する「赤ひげ大賞(第7回)」が贈られた。受賞理由に「『患者さんと家族の気持ちに最期まで寄り添う医療』をモットーに多施設・多職種と連携の下、在宅医療を実践。最期までわが家で過ごせるまちづくりの実現に向け継続的な挑戦を続けている」とある。

千場医師は言う。「赤ひげ大賞は大変名誉なことですが、個人にというよりも地域全体の取り組みに対して贈られたと思っっています」。活動はさらに続く。高齢者人口がピークを迎える「2040年」に向けての勉強会も主宰し、その活動はすでに始まっている。

会報編集部 郡司武



(上)「横須賀市内のあちこちにある助け合いサークルをつなげていきたい」と語る千場医師。
(下)在宅診療の患者さんやご家族とのやり取りを見て、千場医師の「聞く力」を感じた。1つ1つ丁寧に、ゆっくり答えていた。

期で腹がふくれて、腹水がたまっているようだった。抗がん剤治療はもういい、と1か月ほど前に自宅に戻った。夫が終始、「腰が重い」という妻の背中をさすっている。仲のいい夫婦だ。

「何か不自由してませんか?」と千場医師が聞くと、「ごめんね」と主人に言いながら、いろいろやってみてもらっていますので、大丈夫です。主人には申し訳なくて…。ただ感謝の思いだけです」。

そう言うと、妻は涙ぐみ、夫も目頭を押さえた。このご夫婦は5年間、尊厳死協会に入会していた。「千場先生にも出会うことができず、この春、会員継続の手続きは